

---

# 夏祭り ~約束~

城戸 秀作

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏祭り～約束～

### 【NNコード】

N6341A

### 【作者名】

城戸 秀作

### 【あらすじ】

鳥居の下で僕は一年ぶりに彼女と再会することが出来た。照れて手をつなぐことすら出来ない僕たちに無常に別れを告げる花火が打ち上げられた・・・

人ごみの中に僕は彼女を見つけた

「本当に来てくれたんだ」

彼女は懐かしい笑顔で

「約束したじゃない」

と答えた

僕らは並んで歩いた。

一年ぶりの再会で照れを隠せない僕たちは手をつないで歩くことは出来なかつた

「久しぶりだね」

僕は自分の声が震えていることに気がついた

「あなたは相変わらず元気そうね」

「」の一年・・・僕はどれだけ寂しい思いをしたか・・・

「それは・・・私も一緒よ」

彼女の頬から一筋の光るものが流れ落ちたのをみて

僕は場の空気を戻すために 彼女と金魚すくいをすることにした

金魚すくいの出店に着くと彼女は

「私は見ているわ」と言った

その言葉で僕は全てを察し、同時に熱いものが込み上げてきた

彼女の肉体が完全にこの世に戻ってきたのわけではないのだ……

僕は、必死に明るさを装った

けど、涙で視界がぼやけている僕に捕まる金魚なんていなかつた

そんな僕を不思議そうに見ていた

出店のおじさんが

「君、金魚がすぐえなかつたくらいで泣くんじゃないよ

と、言った

そして、一匹の金魚が入った袋を僕にくれた

僕は、一応お礼だけ言い店を去つた

「御免、恥ずかしいところみせちゃつたね

「いいえ、しかたないよ……あの人に……私は見えていないんだから……」

彼女は悲しそうに泣いて言った

ドン

そのとき夜空に一輪の花の花が咲いた

夏祭りのメインイベントである花火大会が始まつたのだ

と、同時に僕たちの別れのときも刻一刻と迫つてくる

「また、会えるよね」

薄らぐ日をこすり僕は彼女に尋ねた

彼女は

「私が君を、君が私を忘れない限り私たちはいつも一緒にいるよ」

僕たちは手をつないだ

その時夜空に最後の花束が咲き乱れ  
そしてゆっくりと散つていった

彼女はうつむいたまま

「そろそろ帰らないと」

僕は限界だった

「うん」

それしか言えなかつた

「私のこと、忘れないでね」

「忘ないよ」

僕は彼女を抱きしめた

「ありがとう」

彼女はそう言い残すと

まだ薄つすらと煙の残る夜空へと帰つていった。

(後書き)

夏祭り（約束）を最後まで読んでいただきありがとうございました  
した  
今後の参考にいたしますので、是非、是非評価のほどよろしくお願  
い致します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6341a/>

---

夏祭り～約束～

2010年12月18日17時37分発行